

(4) シクラメン

主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
軟腐病 (細菌)	<p>①用土は蒸気消毒などにより無病のものを使用する。</p> <p>②移植・灌水などの管理作業で植物体に傷を付けないように注意する。</p> <p>③灌水は過湿にならないように注意する。</p> <p>④古鉢や棚は使用前に必ず消毒する。</p> <p>⑤被害株は発見しだい鉢とともに温室外へ持ち出し、適切に処分する。</p>	<p>①茎葉部のみでなく、球根にも十分かかるように農薬を散布する。</p> <p>(例) ストレプトマイシン・有機銅水和剤(ドーマイシン水和剤) 非病原性エルビニア カロトボーラ水和剤(バイオキーパー水和剤) (発病前～発病初期)</p>
	<p>【参考事項】 梅雨明け前後から8月にかけて発生する。 灌水に使用する水にも注意が必要である。 宿主範囲(ナス科、アブラナ科、キク科、ユリ科、セリ科など)は極めて広い。</p>	
葉腐細菌病 (細菌)	<p>①用土は蒸気消毒などにより無病のものを使用する。</p> <p>②移植・灌水などの管理作業で植物体に傷を付けないように注意する。</p> <p>③高温・過乾・過湿・多肥にならないように注意する。</p> <p>④古鉢や棚は使用前に必ず消毒する。</p> <p>⑤被害株は発見しだい鉢とともに温室外へ持ち出し、適切に処分する。</p>	<p>①鉢上げ時、葉組み時、鉢替え時などに、予防的に農薬を灌注、散布又は土壤混和する。</p> <p>(例) 有機銅水和剤(キノンドー水和剤40・水和剤80・フロアブル)(発病初期) 有機銅粒剤(キノンドー粒剤)(鉢上げ時または鉢替え時)</p>
	<p>【参考事項】 夏季に発生が多く、この時の植替え作業は本病を誘発する。 病原菌は土壤伝染及び種子伝染、二次的には灌水による飛沫や接触により伝染する。</p>	
萎凋病 (Fusarium)	<p>①用土は蒸気消毒などにより無病のものを使用する。</p> <p>②被害株は発見しだい鉢とともに温室外へ持ち出し、適切に処分する。</p> <p>③高温多湿を避ける。</p> <p>④古鉢や棚は使用前に必ず消毒する。</p>	<p>①発病初期から農薬を灌注する。</p> <p>(例) ベノミル水和剤(ベンレート水和剤)</p>
	<p>【参考事項】 本病により腐敗・乾固した株には、白色綿毛状のカビが見られる。この株を放置すると、ここから灌水の水しぶきや風などにより分生子が飛散し、二次伝染をおこす。</p>	
灰色かび病 (Botrytis)	<p>①通風・換気などにより施設内の湿度を下げる。</p> <p>②枯葉や咲き終わった花をこまめに除去する。</p>	<p>①常発ほ場では農薬で予防散布を行う。</p> <p>(例) バチルス ズブチリス水和剤(ボトキラー水和剤)(ダクト内投入) (発病前～発病初期) DBEDC乳剤(サンヨール)(発生初期)</p> <p>②散布する。</p> <p>(例) フルジオキシニル水和剤(セイビアーフロアブル20)(発病前～発病初期) ペンチオピラド水和剤(アフェットフロアブル)(発病初期)</p>
	<p>【参考事項】 梅雨時期や秋の施設を密閉し始めた時期(多湿、結露が発生しやすい)に発生する。 軟弱徒長している場合に多発しやすい。 宿主範囲が広く、空気伝染するため、他の罹病作物が伝染源となることもある。</p>	
炭疽病 (Colletotrichum)	<p>①発病株は早期に除去し、適切に処分する。葉かきなどにより除去された枯葉は、直ちに施設外に持ち出し、適切に処分する。</p> <p>②高温、多湿にならないよう盛夏期の遮光や換気を行う。</p> <p>③地上部への灌水の水はねにより感染するので、発生施設では底面灌水に切りかえる。</p>	<p>①発病初期から農薬を散布する。</p> <p>(例) ペフラゾエート乳剤(ヘルシード乳剤(施設栽培)) 有機銅水和剤(キノンドーフロアブル、オキシンドー水和剤80)</p>
	<p>【参考事項】 発病適温は23～28℃で多湿時に多発する。 農薬の薬効が現れると病斑が乾固して病勢が停止するが、高温多湿条件になると再び発病するので、病斑部や病株は除去する。</p>	

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
ミカンキイロ アザミウマ	<p>①施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。0.8mm目合いの赤色系ネットを使用すると侵入防止効果が高まる。</p> <p>②不必要な花及びほ場内の雑草は本種の発生源となるので、速やかに処分する。</p> <p>③周辺の畑作物や雑草にも寄生するので、除草する。</p> <p>【参考事項】 生育の早い花や施設開口部付近の花での被害に注意する。 可能ならば、夏期に一度施設内の植物（雑草を含む）を除去し、施設を2週間程度密閉し、害虫を蒸し殺すことも効果的である。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。 (例) トルフェンピラド・メタフルミゾン水和剤（アクセルキングフロアブル） エマメクチン安息香酸塩乳剤（アフーム乳剤）（以上、アザミウマ類） カルタップ水溶剤（パダンSG水溶剤） クロルフェナビル水和剤（コテツフロアブル） チアメトキサム水溶剤（アクタラ顆粒水溶剤）</p>
ハスモンヨトウ	<p>①施設の開口部に目合い4mm程度の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。</p> <p>②孵化直後の幼虫は集団で加害しているので、捕殺の効果が高い。</p> <p>【参考事項】 多発するのは7～11月頃である。 若齢幼虫は、葉裏から集団で表皮を残して食害するため、白い食害部が目立つ。 中老齢幼虫は株間にもぐり、若いつぼみや葉を食害する。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。 (例) エマメクチン安息香酸塩乳剤（アフーム乳剤） クロルフェナビル水和剤（コテツフロアブル）（以上、ヨトウムシ類） フルベンジアミド水和剤（フェニックス顆粒水和剤） ルフェヌロン乳剤（マッチ乳剤） ピリダリル水和剤（プレオフロアブル）</p>
シクラメンホコリダニ	<p>①施設間の株移動には注意する。また、セントポーリア、デルフィニウムなどを同じ施設に持ち込まない。</p> <p>②施設近隣の作物（イチゴ、ピーマン、トウガラシなど）から移らないように注意する。</p> <p>③施設周辺の除草を行う。</p> <p>【参考事項】 他の寄生するホコリダニ類として、チャノホコリダニが確認されている。 シクラメンホコリダニによる被害程度は、チャノホコリダニによる寄生に比べて大きい。 初発時の肉眼による発見は困難で、春の幼苗期や9～10月の開花始めに、花や新葉の奇形、変色で気づくことが多い。</p>	<p>登録農薬はない。</p>